

海外派遣プログラム報告書
(UNCITRAL アジア太平洋地域センター)
派遣期間：2017年8月1日—31日

鬼頭あゆみ

業務内容

PPPに関する資料の改訂
ウェブ掲載用記事の翻訳
PPPの紛争解決についての論文のレビュー

レポート

1. 職場環境

オフィスの構成はポルトガル人のヘッドの他、常勤の韓国人スタッフが2名、検察官で2年ほどの契約で働く韓国人1名、香港の法務省から出向中のスタッフ1人という小規模なもので、インターン2名を含めても7名という大変静かなオフィスでした。バカンスシーズンということもあり常に1人か2人は休暇中で、定例の会議も休止されて個人個人が黙々と作業にあたっていました。9:30—18:00が勤務時間とされていますがだれも定時に出勤する人はおらず、夜はヘッドが残っていても自由に帰るといって非常にフレキシブルな職場環境でした。

2. コミュニケーション

もともとの話し方なのかやや英語が苦手なのか、全体的にゆっくりと英語を話してくれる方が多く、想定していたほどは英語で苦勞することはありませんでした。ただ、業務の指示など1対1での会話では相手が自分の発言を待ってくれても、ランチなど複数での会話になると会話に割って入るのが難しく、(リスニングやスピーキングの問題はもちろん)積極性や、自分の話す内容に自信を持つことの重要性を感じました。

韓国での滞在期間を通して、国際機関や欧州の水準では英語は特殊技能ではなくて基本スキルなのだという印象を抱きました。英語を改善するだけでなく、(例えば法律分野など)専門性を身につけなくては評価されない・生き残れないと感じました。

3. 業務

(1) アップデート

PPPについて書かれた10年前の文書をアップデートするという作業に当たらせて頂きました。渡された資料は200頁近くに及び、これを読むだけでかなりハードな作業でした。日本語で書かれた文献でもよいと言われたのですがなかなか参考になる資料が見つからず、英語のサイトを一つ一つ当たって調べていきました。日本人の英語もリーディングだけは悪くないと思っていたのですが、大量の英文資料をチェックしていくにはかなり時間がかかり、これについてもまだ改善の必要があると痛感しました。また当然と言えば当然なのですが日本の法律事務所のように

充実した図書館がないのでインターネット上でのリサーチに限られてしまい、気になった資料にアクセスできず残念な思いをすることもありました。

その他に PPP の定義が統計をとった機関・国によって異なり、矛盾して見えるデータに混乱させられたり、苦労してみつけたデータが異なるアプローチに立つもので使えないとわかり落胆する場面もありました。

進め方という面では当初締め切りを設定されなかったので自分のペースで取り組んでいたところ、いきなり進捗状況について話し合いを設けられたりすることもあったので少々戸惑いました。

PPP のリサーチに当たっては、ロースクール在学中にプロジェクトファイナンスのゼミを受講したことが非常に役に立ちました。なじみのないファイナンススキームを、母国語でない言語で書かれた文書で理解するのは、事前知識が全くない状態では厳しかったと思います。

課題として与えられた PPP についての資料は PPP の定義やあり方について多くのページを割いていました。ヘッドと話したところ、PPP はその定義や必要な条項について十分に検討されないうまま実務で発展してきたもので、今改めて考えるべき時なのだとのことでした。私にとっては、実益を優先的に考える民間の法律事務所との違いを感じた瞬間でした。今回の滞在期間を通じて、国際機関・各国政府・研究者・民間企業や法律事務所が協働して新しい法制度を生み出していく、そのプロセスの一端に触れることができたように思います。

(2) ニュース記事の翻訳

これは日本の法律事務所のインターンなどで経験することも多く、比較的取り組みやすい業務内容でした。もっとも、中国人インターン生の翻訳は香港からのスタッフが添削をしてくれるのですが、自分の他に日本語版を修正できるスタッフがいないので責任を感じました。単純なカンファレンスのお知らせなどであればさほど難しくないので、新しいモデル法についてのニュースなど、法的な正確性が要求される記事についてはどう翻訳すればよいのか、かなり悩む時もありました。

(3) レビュー

最終週の月曜日、帰国の3日前にいきなり「この論文を **critically** にレビューして下さい。」と言われて正直かなり面食らった業務でした。おそらく先に提出した PPP のアップデートをレビューする時間がなくて私が暇にならないようにアサインして下さったのだと思いますが、やや不完全燃焼で終わってしまった感があり、悔いが残っています。

4. その他

(1) 他国への関心

UNCITRAL アジア太平洋地域センターにいる方々はみなアジアと繋がりが多く、私に対していくつも日本の話題を振ってくれました。話しやすいだけでなく、非常に思いやりを感じる対応でした。日本の観光地やサブカルチャーについて私より多く知っている人も少なくなく、毎日甲子園を観戦していたり、加計学園問題で安倍政権の支持率が低下していることまで知っているのが驚きました。韓国の前に個人的にヨーロッパに行ったときは(当然ですが)日本のこと

をよく知らない人がほとんどで、こちら相手国のことを知らないためにすぐに話題が尽きてしまいがちだったのですが、海外のニュースやカルチャーにアンテナを張るということは、自分の知見を広げるだけでなく、円滑なコミュニケーションという面でも重要なのだなと感じました。

(2) ESCAP インターン

同じビルに入っている ESCAP のインターン生ともランチに行く機会が何度かありました。どの国出身のインターン生も英語が堪能だけでなく国際経験が豊富で、自分の母国を離れることに抵抗が少ないように見えました。おそらく南米出身であるけれど欧州・中国・日本・韓国で勉強した経験がある人、(私にとっては日本以外で生涯働くことはほぼ考えられないのに)「どこ(の国)で自分のキャリアを終えるか想像がつかない」と話すベルギー出身の人、等身の回りの日本人ではほとんど見かけないバックグラウンド・感覚の持ち主に会い、新しい世界を見た思いがしました。

(3) 男女比率

また、インターン生に占める女性の比率の多さには驚きました。UNCITRAL の 2 人のインターン生が二人とも女性だっただけでなく、ESCAP の 4 人のインターン生も全員女性で、UNCITRAL の常勤スタッフによると最後に男性のインターン生を見たのは 1 月(半年以上前)だということでした。ロースクールにおける男女比率も、ドイツは半々、香港や中国本土は女性の方が多いと聞きました。重要なポジションには男性が就いていることが多いという点はあるようですが(妊娠出産等で時間をとられるため)、これほどの違いがあるとは思っていませんでした。学部から法科大学院にかけて女性が少ない環境で過ごしてきて、特段不自然さを感じたことはありませんでしたが、今の日本の状況について考えるきっかけになりました。

(4) 他の機関の日本人

UNCITRAL の地域センターがある建物にはその他にも国連関係の機関が数多く集まっていて、日本人職員の方と 6-7 人でランチをご一緒することができました。インターン生からは聞くことのできない具体的な業務内容、職場の現実等について有意義なお話を伺うことができました。日本人は内向きで海外に出ないと言われていますが、早くから海外に出て国際機関で働いている方々に接することはとても新鮮で、良い経験になったと感じています。またその日本人会で知り合った方のご紹介で GCF のリーガルカウンセラーの方にもお会いする機会を設けていただき、より大規模な国際機関の法務部門の活動について知ることができました。

5. 終わりに

今回の滞在を通して、多くの得難い経験をすることができました。これを糧に今後も努力を続けて参りたいと思います。

最後になりますが、派遣先との交渉にあたって下さった先生方、事務局の川村様、8 月の人手不足の時期に受け入れて下さった UNCITRAL スタッフの方、貴重な機会を提供して下さいました。ありがとうございます。